

I、緒言

はじめに

2013年度に厚生労働省が全国の児童相談所に実施した調査によると児童虐待の通告件数は年々増加している。改正児童虐待防止法では、医療機関は児童虐待の早期発見及び通告義務が課せられている。小児虐待の発見場所は外来が多く、特に救急外来であり、死亡例のうち57.2%には受診歴があったともされており取り組みが必要な課題と考える。その中でも看護師は手探り状態で児童虐待の予防・早期発見・援助を行っていると考えられるが子どもや家族にとって身近な存在であり虐待を発見しやすい立場にあることから、子どもの安全を守りつつ地域と連携を図り虐待防止に積極的に取り組むことが求められている。しかし、看護師の虐待に関する認識や通告行動に何が関連するか影響要因については明らかになっていない。以上から医療機関の児童虐待の取組の実態状況を調査する事が必要であり、さらに児童に最も近くにいる看護師の通告行動に影響する影響要因を調査研究する事は重要であると考えられる。

II、研究目的

1. 大規模病院に勤務する看護師を対象に児童虐待通告の実態を明らかにする。
2. 通告行動に影響する要因として児童虐待の認識や院内の虐待への組織的対応状況などが指摘されている。これらが看護師の通告行動に影響しているかを明らかにする。

研究方法

研究対象について

人口150万都市である政令指定都市A市の児童虐待対策組織を持つ8病院に勤務する看護師。

分析方法について

従属変数を身体的虐待とネグレクト事例とし、独立変数を各質問項目とし、カイ二乗検定を用いて優位な割合の差が出た項目を見ることとした。さらに多重ロジスティック回帰分析を行い変数増減法にて影響力のある要因が何かを分析した。

III、研究結果

研究成績

研究協力に応じた病院は4病院。看護師262名に配布し、回収出来たのは145部(55.3%)であった。今回の調査では被虐待児に出会った経験があるは46.5%、ないは47.9%であった。どのような虐待かについては虐待の疑い事例が53.3%、明らかな虐待事例が35.6%である。虐待の種類は身体的虐待が大半を占め52.7%、ネグレクトが32.7%で続く。虐待の通告に至った事例はある65.7%で虐待の通告事例に該当するケースの経験がある看護師が半数以上である。

ネグレクト事例を従属変数として多重ロジスティック回帰分析を行い単変量解析にて有意であった影響要因を投入し多変量解析を行った結果、児童虐待の認識の影響要因である子どもが精神的に不安定なのに病院へ連れて行かない(オッズ比25.869、95%CIは1.069~626.167)、乳幼児が泣いていても無視して抱っこしない(オッズ比20.727、95%CIは1.354~317.368)であった。

被虐待児に出会った実態の結果

項目	n 数	(%)
被虐待児に出会った経験	ある	67 (46.5)
	ない	69 (47.9)
	わからない	8 (5.6)
	未回答	1 (0.01)
どのような虐待か*	明らかな虐待事例	32 (35.6)
	虐待の疑い事例	48 (53.3)
	退院後に虐待が明らかになった事例	5 (5.5)
	個人的に虐待を疑った事例	5 (5.5)
虐待の種類*	身体的虐待	58 (52.7)
	心理的虐待	13 (11.8)
	性的虐待	3 (2.7)
	ネグレクト	36 (32.7)
通告に至った虐待事例	ある	44 (65.7)
	ない	23 (34.3)
1年間に虐待に遭遇した事例	1例	11 (26.2)
	2例	22 (52.4)
	3例	6 (14.3)
	4例	2 (4.8)
	20~30例	1 (2.4)

*複数回答可

多重ロジスティック回帰分析の結果 (ネグレクト事例)

単変量解析						多変量解析						
回帰係数	標準誤差	有意確率	オッズ比	95% 信頼区間		回帰係数	標準誤差	有意確率	オッズ比	95% 信頼区間		
				下限	上限					下限	上限	
看護師の児童虐待の認識												
子どもが精神的に不安定なのに病院へ連れて行かない	1.116	.423	.008*	3.051	1.521	6.993	3.253	1.626	.045	25.869	1.069	626.167
乳幼児が泣いていても無視して抱っこしてあげない	.910	.429	.034*	2.484	1.227	5.760	3.031	1.392	.029	20.727	1.354	317.368

IV. 考察

今回の看護師に向けての調査であるが被虐待児に出会った看護師は半数ほどいる。そして身体的虐待とネグレクトが多い一方で、心理的虐待、性的虐待は低率というのが示される結果となった。医療機関が遭遇する児童虐待については身体的虐待とネグレクトが多い状況である。医療機関に搬送される被虐待児童はまず身体的虐待、ネグレクトが多いという状況を考慮し児童と関わっていく必要があると言える。多重ロジスティック回帰分析の結果、児童虐待の認識がネグレクト事例について最も影響がある事がわかった。

認識について、ネグレクトや心理的に不適切な関わりであってもしつけや家庭内教育の一部という捉え方が社会的通念となりがちである事が先行研究から示唆されている。専門的な教育を受けている看護師であるからこそ、不適切な関わりを社会的通念に影響されず、家庭内の教育と認識しない事が看護師の通告行動に繋がると考える。

V. 結語

1. 本研究の対象者では身体的虐待、ネグレクトを受けた被虐待児に遭遇している看護師が多く、病院では身体的虐待とネグレクトの遭遇が多いという実態が示された。
2. ネグレクト事例を従属変数として多重ロジスティック回帰分析を行った結果、看護師の通告行動に影響している要因はとして認識が最も影響があり、専門的な視点からネグレクトや心理的虐待への認識を高めていく必要がある事が今回の研究では示唆された。

VI. 研究成果とその活用

要保護児童対策協議会の医療機関の実態を示す資料として活用されることが望ましい。

VII. 謝辞

指導していただいた教員の皆様、協力していただいた地域の病院関係者の皆様に感謝いたします。

この活動は 2015 年度湘南藤沢学会研究助成基金の支援により行われた。